

# 算命学中庸

## 【初年】 33回目

33回目の授業はこのページからです。

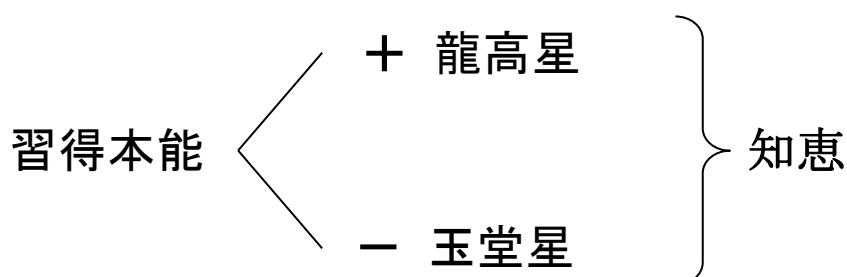
授業科目 【十大主星特性⑤】

【初年】 33回目 【十大主星特性⑤】 01

➡ 龍高星・玉堂星

りゅうこうせい ぎよくどうせい  
龍高星・玉堂星は習得本能の星です。

習得本能にも、陽の習得星・陰の習得の星があります。



習得本能ようせいの陽星は龍高星、陰星いんせいが玉堂星です。

「五本能」最後の二星で『習得本能』になります。

龍高星の〔龍〕は、簡単な〔竜〕でも構いません。

本来は難しいほうの字ですが、省略して、簡単な字で書くことも多いので、どちらをつかってもよろしいのです。

習得本能といえは“ち え ほんのう知恵の本能”と言葉を置き換えて、考えるとわかりやすいでしょう。

習得本能というのは、知識を習得しようとする本能ですから、習得した知識はその人の知恵になります。

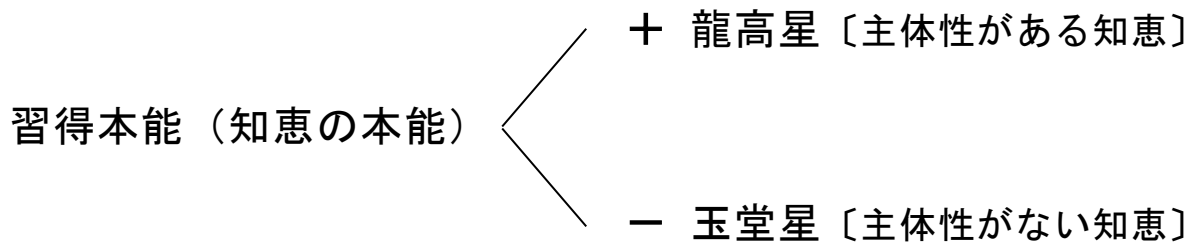
ゆえに、初めから知恵の星と考えたほうが、わかりやすいことが多いのです。

参考・知恵〔物事の理を悟り、とっさの判断や適切に処理する能力〕

そこで〔龍高星〕〔玉堂星〕という二つの知恵の星について考えます。〔陽の知恵〕と〔陰の知恵〕があります。

〔陽の知恵〕 主体性がある知恵です。

〔陰の知恵〕 主体性がない知恵です。



（陽）は主体性がある知恵です。

（陰）は主体性がない知恵です。

〔主体性のある知恵〕は 自分なりの知恵 といえます。

龍高星は……主体性があるほうの知恵です。

言葉を替<sup>か</sup>えれば、人の意見や考えをそのまま受け入れる知恵ではなくて、自分なりの思いつき・着想<sup>ちやくそう</sup>で物事をやろうとします。新しいものをつくりだす知恵の発揮といえるでしょう。龍高星には“改革”の意味があります。

玉堂星は……主体性がないほうの知恵です。

伝統的な物事など、先達<sup>せんだつ</sup>・先学<sup>せんがく</sup>から教えてもらって習得したことを、深く掘り下げて、知恵として発揮するといえるでしょう。

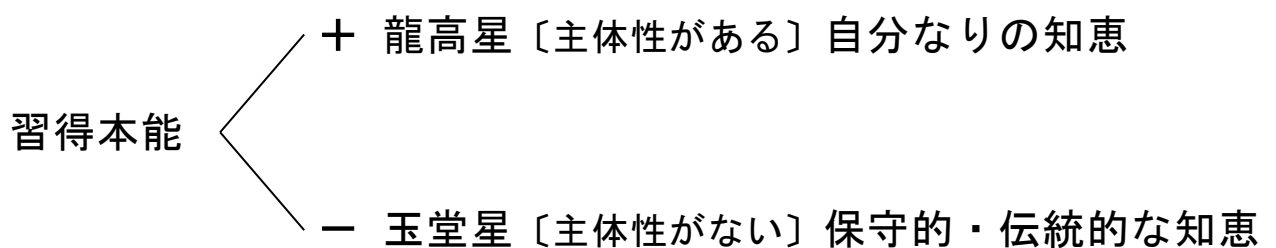
参考・先達〔その道の先輩〕 先学〔学問上の先輩〕

先祖代々「こういうときはこのようにする」というような伝統に基づいた知恵の発揮は玉堂星です。

あるいは、世の中の一般的に伝わって来ていることを、習得して磨き、知恵として発揮するともいえるでしょう。

まずは、玉堂星を“伝統的な知恵”としておきます。

習得本能（知恵の星）⇒ 龍高星と玉堂星の違いです。



☞ 龍高星〔陽星〕から話を進めます。

## ☆ 龍高星

龍高星 ⇒ 習得（陽）

龍高星は〔習得本能〕あるいは〔知恵の本能〕の陽星です。陽の知恵で主体性があり“自分なりの知恵”を発揮しようとする星です。

おなじことをするにしても、人から伝えられた事柄をそのままに受け入れてやるのではなくて、自分なりに工夫して、自分の創意で物事をやりたい、そういう本能をそなえています。

それゆえに“ひとのまねをするのが嫌い”という特徴があります。

自分なりの知恵を発揮したい人が、他者と<sup>たしや</sup>おなじに真似ただけでは、自分なりの知恵になりません。

龍高星の人は、おなじことをするにしても、異なる手段・工夫をして、「私はこのやり方です」という星です。

それゆえに、まわりの人が龍高星をもつ人を見ると……考え方も性格も個性的に見えます。

個性的

龍高星は伝統に逆らうかのように“自分なりの知恵”を發揮するので、どうしても性格も個性的になるわけです。

自分なりの知恵を發揮しようとするわけですから、模倣するのではなくて、創造のチカラです。

ゆえに、創造力が豊かな人だともいえるはずです。

### 創造力

参考・創造力〔自分の考えや技術で、新しいものを生み出す能力〕

発想の閃ひらめきもなく、創造的でなければ、自分なりの新しいものを創作することはできないでしょう。

なにかに興味をもつにしても、なにかを造るにしても、みんながやっているような、ありふれたことでは、自分なりの知恵を出したことにはなりません。

頭の良い星といえます。

龍高星は習得本能の星ですから、知識を習得しようとする本能がとても強いわけです。

おなじ知識・物事を習得するにしても、習得する段階から、変わったものに興味をもつとか、斬新ざんしんなものに惹か

れる傾向をもつ星です。

変わったことに興味をもちますし、斬新なことが好きです。

どこにでもあることをしているのでは、個性の発揮にも、知恵の発揮にもなりませんから、どこか異なる珍しいものを好みます。

陽占〔人体図〕のどこかに、1つでも龍高星があるとか、複数あるとか、主星が龍高星であったりしますと……、  
〔たとえば〕買い物にでかけて、ものを選ぶにしても、チョット風変わりなもの、人とは異なるもの、違うデザイン、そういった品物を選びやすいといえます。

個性あふれて、<sup>しょうび</sup>賞美する価値のある作品に惹かれます。

もちろん、どなたでも自分なりに賞美する品物を選んで購入するわけですが、龍高星はほかと異なった<sup>おもむき</sup>趣のある品物、<sup>きばっ</sup>奇抜ともいえるものに、惹かれるようです。

算命学は——龍高星を“改革心がつよい星”と考えています。

改革心がつよい

龍高星は「改革心の星」と考えればよろしいです。

物事を自分の知恵で工夫して、改革するということが得意です

人の真似が嫌いだというのも、改革心が強いあらわれといえるでしょう。

人に同調・追従しているだけでは改革になりません。

おなじ仕事をするときでも、人がやっていること、教えられたことをそのまま受け入れて、真似するのではなくて、自分なりの創意工夫を加えてやっていく星です。

奇抜でめずらしいことに、興味を抱くのも、改革心が強いからといえますし、個性的な考え方をするのも、改革心が強いからといえるでしょう。



それゆえに、どうしても人と違った考え方になりやすいので、個性的になるわけです。

“改革心の星”と考えればよろしいです——といいましたが、人と違うことを好みますから“変わり者”に見られやすいのです。

### 変わり者

そして、体制か反体制かといえは……。

反体制側につきやすい星です。

もちろん体制につくのか、反体制につくのかを迫られたときに、状況によっては、体制側につくこともあるでしょうけど、性格的には反体制のほうが好きです。

人とおなじなのは嫌だ、<sup>いや</sup>という質をもつ星です。

そして、内面に『不満の気』をもちます。

### 不満の気を内在する

“内面に不満を抱える”これは龍高星の一つの特徴になる部分です。

改革心が強い星ですが、なぜ改革心を出そうとするのか、  
と考えると——不満足だからです。

いままで踏襲<sup>とうしゅう</sup>してきたやり方、ほかの人の考え方に満足  
なら改革をしないでしよう。

なにか不満足だからこそ、改革しようという気になるわ  
けです。満足できないので、自分なりの知恵を出したく  
なるのです。

龍高星という星は、もともと内面に不満足<sup>ふまんじく</sup>の気を内在し  
ている星です。

もっと優れたものにしよう、もっと工夫してよい作品に  
仕上げよう、もっといい閃きはないだろうか、そのよう  
に具現されるのは、改革心のよい発揮です。

### 良い発揮 ⇒ 改革

しかし……不満足<sup>ふまんじく</sup>の気が悪く出る場合があります。

悪く出ると、素直でない、ひねくれも者です。

### 悪い発揮 ⇒ へそ曲がり

自分なりの知恵といっても、悪く出ると偏屈<sup>へんくつ</sup>です。

「みんなが右へ行くのなら、僕は左へ行く」とかなら、  
ただたんに、人とは違うやり方をしているだけです。

つまり、ねじけた発揮ですから、改悪<sup>かいあく</sup>ということにもなります。 参考・改悪〔ものごとを改めて、かえって悪くすること〕

もともと内在されている不満足のが、改革という形で発揮できるのが理想的な出方なのです。

しかし、それが出来ないと、ヘソ曲がり、他者のしたことにケチをつけたがる人になってしまいます。

### 他者が決めたことには、ケチをつけたがる

〔たとえば〕友人がハンドバックを買ったとします。

「私、素敵なバック買ったのよ、見てよ」と、龍高星の人にいったとします。

龍高星の人がそれを見て、「あらいいわね。でも色合いが、ちょっとイマイチね」とか、なにかと“粗探<sup>あらさが</sup>し”をして、ケチをつけます。そうすることで、自分の改革心をなんとか満足させようとする。そういう人間になってしまうことがあります。

普段から——良い改革心をキチンと発揮してないことで悪い出方をしてしまうのです。

このような星なので――、

**仕事 ⇒ 閃き・思いつきとか、考案を必要とする仕事**

つまり、創造力を発揮する仕事に向いています。

頭をつかう仕事に向いています。

頭をつかうといっても“自分なりの知恵”を出そうとする星なので、創造力を発揮するとか、自分が思いめぐらせた考え方を必要とする仕事です。

上司にいわれたから、従来のやり方で、その通りにやることではわけです。

知恵をぎゅっと絞って、作戦を立てて、物事を進めることが得意な星です。

☞ 龍高星には、もう一つ大きな特徴があります。

「改革心の星」ですが、自分が生まれ育った環境とか、自分が現在いまおかれている状況に対しても発揮されます。つまり、自分が直面している生活に対しても、改革心が出るわけです。

ということは、毎日の生活がおなじことの繰り返しだとすれば、自分の置かれた状況をどのように思いますか？

改革心が強いのに、毎日がおなじことの繰り返しでは、つまらなくて、飽きてしまいます。

龍高星にとっては、なにか変わったことが起こってくれたほうが楽しい——そのように想う星です。

改革心が強いので……、

毎日の生活がおなじことの繰り返しではつまらない。



不満



変化を好む

改革心の発揮のしようがないので、不満になってくるのです。それゆえに、龍高星は変化を好みます。

つぎに——、

自分はここで生れて、ここで育ちましたということで、生まれ育った場所にいつまでも居るだけでは、踏襲とうしゅうの生き方であって改革にはなりません。

おなじ環境にずっと居るだけでは改革になりません。

それゆえに、龍高星は自分の生まれ育った環境とは異なる世界に憧<sup>あこが</sup>れるし、興味をいただくようになります。

生まれ育った場所・環境とは異なる世界に興味をもつ



遠いところへ行ってみたい

自分が東京で生れて、東京で育ったとすれば、東京ではないところ——東北でも、九州でも、どこでもよいのですが、遠くへ（違うところへ）行きたいとする思い・欲求がほかの星よりも強いのです。

どこか遠くへ行きたい、日常生活とは違う場所に行きたい星です。

〔たとえば〕旅行に行って、そこで何日かでも過せば、改革心が満足するわけです。

毎日、毎日おなじ生活の繰り返しはつまらなくて、変化を求めます。

その意味では“旅行に行く”のは手っ取り早いですね。

ゆえに、龍高星は日々の生活でストレスが溜まってきたと思ったら、その解消法は旅行に行くことです。どこか知らない土地へ行く、いままで行ったことのない場所で

あれば、それが観光地であってもよいのです。

### 見知らぬところへ行く

知らないところへ行けば変化を味わえます。日常生活とは違った体験ができるので、改革心が満足します。気分がさわやかに一新して、生き生きします。

変化を求める生来の質をそなえていますので、この質がもっと強く出てきて——遠くといえば外国です。

海にかこまれた日本から、一番遠いのは外国です。

それで龍高星には“外国の星”という意味があります。

龍高星は **外国の星** とも呼ばれます。

それゆえに、外国で暮らして行く、見知らぬ土地で暮らすには、向いている星です。

あるいは——自分が直接外国に行かなくても、外国関係の仕事に就くとかもよいですね。

貿易会社、海外取引の商社、旅行会社とかに勤めるのも選択肢です。

海外にあこがれる、興味をもつ

外国で暮らす

外国関係の仕事

☞ 海外へ出て行って成功するためには、少なくとも龍高星が一つは必要だと考えてください。

外国で成功するには、龍高星が一つは必要である

〔たとえば〕皆さんが将来——鑑定で相談されたとき、「外国に移住しようと考えているのですけど」とか——「外国で仕事をしようと思うのですが、自分に向いていますか……？」と訊かれたときは、まずは人体図を見て〔龍高星〕が一つもなければ、「残念ながら向いていないです」と答えてもよいのです。

☞ 短い期間の場合、1年とか、2年とかで日本に戻って来るのであれば、〔龍高星〕がなくても問題はありません。

しかし、長い人生を外国で暮らすのであれば、〔龍高星〕は必要だと考えてください。



☞ 龍高星の人物は“偏母（へんぼ）”といいまして、育ての母です。

人物 ⇒ 偏母〔育ての親〕

龍高星（陽星）の人物は、<sup>へんぼ</sup>〔偏母〕になります。

つぎに学ぶ玉堂星（陰星）は、母親<sup>じつぼ</sup>〔実母〕になります。

玉堂星は実母の星です。その陰陽で母とは違う・母のような存在という意味で偏母（育ての母）とといいます。

あるいは、実の親以外で、面倒を見てくれる人物を指します。その場合には、女性とは決まっていません。

実の親以外で、面倒を看てくれる人物

この人物は“誰”<sup>だれ</sup>というふうに特定できないのですが、実の親以外で面倒見てくれる人だから、本当の親が存在なくても（死んでしまったとか……）、姉とか、兄に育てられたということであれば、その人物が育ての親ですから、この龍高星に相当する人物になります。

あるいは、育ての親という姿でなくても「自分は小さい頃、おばあちゃん子で、おばあちゃんに可愛がられて、おばあちゃんに育ててもらったようなものです。という

ことであれば、おばあさんが〔偏母〕に相当します。

「養子縁組している」とか「里子に出された」と、いうような場合でなくても、実の親以外で面倒を看てくれる人は〔龍高星〕に相当します。

〔たとえば〕実際の話として……吉田茂（日本初の総理大臣）は、竹内綱（実父）と竹内滝（実母）の五男として生まれましたが、生後何日目かに、実父の友〔吉田健三〕に養子として貰われて行きました。

吉田健三の妻は〔吉田士<sup>こと</sup>〕です。養父の吉田健三は早世しましたので、吉田士が吉田茂を育てたわけです。

それゆえに、吉田士は吉田茂の偏母になります。

吉田健三という人物は、日本が鎖国時代に英国船に乗ってイギリスへ渡り、明治元年に帰国しています。おなじ時代に、吉田松陰が米国の黒船に乗船しようとして、捕縛されて斬首<sup>ざんしゅ</sup>されました。吉田健三は、日本に帰国してから、竹内綱と共に日本で初めての新聞〔日々新聞〕を発行しています。現在の毎日新聞の前身です。

吉田健三は吉田茂が〔9歳〕のときに、若くして他界しますが、吉田茂に莫大な財産を残しました。

もしかすると、親戚のおじさん・おばさんかも知れないし、近所のお兄さん・お姉さんに、良く面倒を<sup>み</sup>看てもらって、可愛がってもらったとか……それでもよいです。

それゆえに、龍高星がある人とか、龍高星がいくつもあるような人は、実の親以外の人物に面倒を見てもらうことが多くなりやすいのです。

言い換えれば、実の親以外の人になつきやすいのです。

面倒を見てくれる人というのは、通常は、自分より目上のはずですから、はじめから“目上の星”というふうにして占うこともあります。

特に本人が大人になると、育ての親とか、面倒を見てくれる人物というのは、それほど身近な存在ではなくなる場合も多いはずです。つまり、大人になっても、面倒を見てくれるような立場にいる人といえ、具体的には先輩とか上司とかでしょう。

### 先輩・上司

その意味で、上司・先輩も含まれます。

〔たとえば〕仕事上の占いで、上司との関係を占うときは、龍高星をつかって観ていくようにもなります。

龍高星の人物設定は、いくぶん難しいのですが、まずは、偏母の星と考えます。そこには、目上の人達も含まれるというふうに思っておいてください。

⇒ 龍高星の思考法：

**思考法 ⇒ 改革思考**

龍高星の最大の特徴は“改革心の強い星”です。

それゆえに、思考法も改革思考といわれます。

他者の真似をするのではなくて、自分なりの知恵を発揮したり、改良したりして、物事をやろうという人になります。

**他者が想いつかないようなアイデアを出せる人**

しかし、これが悪く出ると——意味もなく、あえて他者とは、違った考え方を出すようにもなります。



**へそ曲がり**

良く出るのか、悪く出るのか、どちらのほうが多く出る

ようになるのかは、宿命全体を観ないとわからないのですが——いずれにしても、龍高星そのものは、他者とは少し異なる考え方をするので。

それゆえに、特に龍高星が主星の人をまわりから観察していると、いったい何を考えているのか、わからない人になります。

まわりから見て、なにをを考えているのか……わかりにくい星

まわりから見てわかりにくい星は、十大主星のなかに、もう一つ〔調舒星〕がありました。

調舒星 }  
龍高星 } この二星はその代表です

〔調舒星〕と〔龍高星〕の両方をもっているとすれば、特に何を考えているのか……わからない人になります。

👉 つぎは、十大主星の最後〔玉堂星〕です。

## ☆ 玉堂星

### 玉堂星 ⇒ 習得（陰）

玉堂星〔習得本能〕あるいは〔知恵の本能〕の陰星です。  
玉堂星は陰の星なので、主体性はないのです。

それゆえに、自分なりの知恵・創意工夫でなくてもよいわけでは  
ありません。

よい知恵であれば、ドンドン取り入れて、自分の知恵や  
知識を磨く糧かてにしていきます。

それゆえに“伝統的な知恵”の意味があります。

### 玉堂星 ⇒ 伝統的な知恵

まわりから教わったこと、あるいは、先祖代々続いてき  
ているやり方、そういった事柄をそのまま習得して――  
自分の知恵にしようとする質をもっています。

### 伝統的な知恵／保守的な知恵

このことを頭に入れておいてください。

玉堂星は **知恵・学問の星** といわれます。

習得本能は知識を習得しようとする本能ですから、いろいろなことを知ろうとします。知りたくなります。

そして、知ったことを自分の知恵にしますから、学問に向いています。

その意味で玉堂星は「知恵・学問の星」といわれます。

学問を習得するには、そのものに自分の気持ちが強く、引きつけられることが必要です。

それゆえに“探究の気骨が強い星”です。

質は（陰）なので、自分の主体性にはこだわりません。

他者とおなじことを、探求してもかまわないわけです。

龍高星のように、特に自分なりの知恵でなくてもいいわけです。

なにかを探求する質が強いので、自分の興味あることが出てきますと、もっと知りたい……深く掘り下げて知りたい。というふうに発展していきます。

その知りたいことを自分で調べたり、勉強したり、とき

には人に訊ねたり、さまざま<sup>たず</sup>な方法で、知りたいことの知識を高めようとする人物だと考えてもよいですね。

それゆえに、頭をつかうことが好きです。得意です。

頭をつかうことが好きで得意



自分の興味のあることに研究熱心

特に自分の興味のあることに、大変研究熱心です。

一生懸命に習得する……というふうになります。

龍高星のように自分の主体性にこだわりませんので——  
幅広くいろいろなことを習得しようとする星です。

龍高星よりも、対象の幅が広い

知恵・学問の星といいますと、堅く聞こえますけど……

〔龍高星〕も〔玉堂星〕のどちらも好奇心は強いです。

その好奇心の出方は、陽星と陰星では異なります。

〔たとえば〕“世の中の流行にかぶれやすい” ミーハーは  
龍高星と玉堂星のどちらだとおもいますか……？

玉堂星のほうがです。

頭をつかうことが好きで得意、探究の気持ちが強いので、

「知恵・学問の星」となりますけど、何に興味をもつのかは、最初から決まっているわけではないのです。



堅い学問に興味をもつとは限りません。むしろ、幅広くいろいろなことに興味をもちやすいのが玉堂星です。

それゆえに、<sup>いま</sup>現在みんなが注目していることがあれば、「私もそれを知りたい——」となるわけです。

〔たとえば〕“コロナ対策にはこれ” そのようにいわれると、「本当のことがもっと知りたい」という感覚です。

### ミーハーな側面がある

「知恵・学問の星」といえば、堅くきこえますが……、玉堂星は柔らかい出方も発揮します。

その柔らかいほうの側面はミーハーなところでは。

その部分が悪く出る場合もあります。

ミーハーなところが悪く出て、<sup>ひと</sup>他人のことに必要以上に興味をもってしまったりとか、<sup>ひと</sup>他人の離婚話、<sup>ひと</sup>他人の家庭内のことなどを、普通の人以上に知りたがったりするようになります。

特に主星が〔玉堂星〕の人は、自分が<sup>いま</sup>現在——熱中できるもの、それは仕事でも、趣味でも何でもいいです。

そういう対象がない場合は、どうでもいいようなことに、玉堂星の習得本能を向けるようになってしまいます。

研究する対象、興味のあること、夢中になるものがないと、探究と好奇心が相まって、どうでもいいようなことを……自分のまわりの人に向けることが多くなりやすい傾向があります。

人の家のもめ事とか——「あの人の夫はどうだ、こうだ」とか、「あそこの奥さん、家を出ていったらしい、なんで出ていったのかしら」とか、自分に直接関係ないのに、興味シンシンになってしまっ、そのことで問題を起こしてしまう。そういう可能性をもっています。

学問的なことだけに興味をもつ、探求するだけが、発揮の仕方ではありません。

もっと身近な事象に発揮されることもあるわけです。

それが良く出ることもあれば、悪く出ることもあります。

☞ 人体図を観たときに、玉堂星が主星の人とか、玉堂星がいくつもある人物がまわりにいた場合には、その人を見て、その人が他人の<sup>ひと</sup>ことばかりに興味や関心をもち過ぎていて、とすれば「この人は、いま熱中する対象がほかに無い」とおもえばよろしいでしょう。

つまり、この人の習得本能が悪いほうへ出ている……と考えることができるわけです。

⇒ 玉堂星の大きな特徴は **母性愛** を備えています。

玉堂星を人物に置き換えると、母親（実母）の星になります。子に対する愛情を本能的に備えている母の愛という意味で“母性愛の強い星”です。

参考・本能的〔本能によって身体や感情が動かされるさま〕

男性であれば“子煩悩な人”と占えばよいでしょう。

男でも女でも、母性愛を備えている星です。

玉堂星をもつ人が母親になると、一生懸命に子供へ愛情を注ぎますから、とても母性本能の強いお母さんになります。

男性でも玉堂星のある人は、子どもが出来ると、子煩悩なお父さんになるといえます。

玉堂星の母性愛というのは……玉堂星をもっている人に、実際には〔子供がいない〕としても、母性愛の質が強いわけですから“面倒見がよい人”になります。

ですから、その人に〔子供がいる〕〔子供がいない〕に、関係なく、面倒見がよい星といえます。

参考・母性愛〔母親がもつ、子に対する先天的・本能的な愛情〕

ふつう面倒を見るのは、自分よりも目下の人に対しての場合がほとんどでしょうから、自分の子供ではなくて、人様の子供、あるいは後輩とか、あるいは年齢に関係なく、弱い立場にいる人などに対して、何とか助けてあげたい、面倒見てあげたい……そのような愛情をもっている星と考えておいてください。

その愛情が動物に向けられると、犬とか猫などを飼って、愛情をそそぐ人にもなります。弱いものとか、小さいもの、それらに玉堂星の母性愛の本能が発揮されます。

しかし、愛情をそそぐ対象が人間だと……相手が感謝するのかどうかわかりません。もしかしたら「おせっかいはやめてっ」そのように思われるかも知れません。

玉堂星が母性愛を発揮するのは“宿命どおり”の生き方です。愛情をそそぎ込むと対象があると、満足できます

ので、自分自身も生きやすく、活き活きして精神も安定します。

⇒ 女性は母親になると強くなります。

母になると、玉堂星の母性愛を大きく・たくさん発揮することになりますから強くなります。

自分のためとか、夫のためには出来なくても、子供のためだと思えば強くなれます。しっかりもします。

男性で玉堂星のある人は、自分のもっている愛情を向ける対象が必要です。

面倒を見る対象は、部下・後輩でもよいのです。

仕事の上で若い社員を指導する、仕事面で成長するように面倒を見る——それでもよいのです。

そうすることで、自分自身が安定するのです。

自分が愛情を向ける対象がないと、精神が不安定になります。そういう質の星です。特に主星が玉堂星の人は、学問でも、趣味でも、興味を向けることができる・集中することができる対象を、まずは一つもつことです。

それと、自分の愛情を注ぐ対象も 1 人もつことです。

〔1 人と限らなくても、いいですよ〕

なにかに対象を設定して“それを生きがいにする”と、玉堂星の人は、精神が安定して、宿命が生きてきますので、運勢も伸びて行くようになります。

〔たとえば〕「私は、<sup>いま</sup>現在、このことに夢中で、集中しています」という学問とか物事。

そして……、

〔たとえば〕この子のために一生懸命で頑張っている。あるいは、この人たちの自立のために——とか、なにか慈愛を発揮できる対象があるとよいのです。

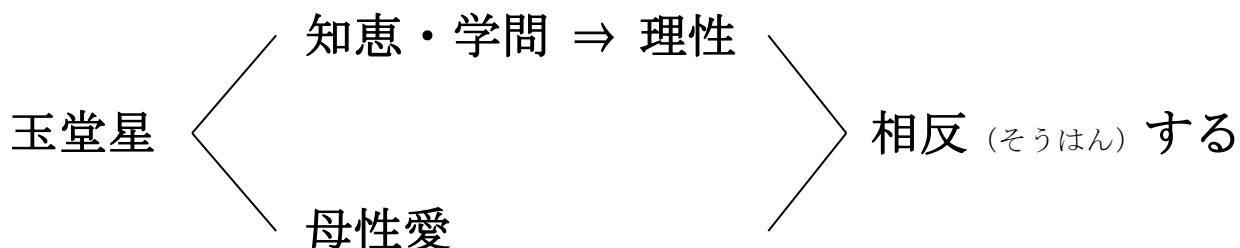
その両方がそろると、最もこの星が光り輝きます。

☞ 玉堂星には「知恵・学問の星」という意味合いと——  
「母性愛の星」という意味合いがあります。

この二つが 2 大特徴だとおもってください。

ところが…… ➡

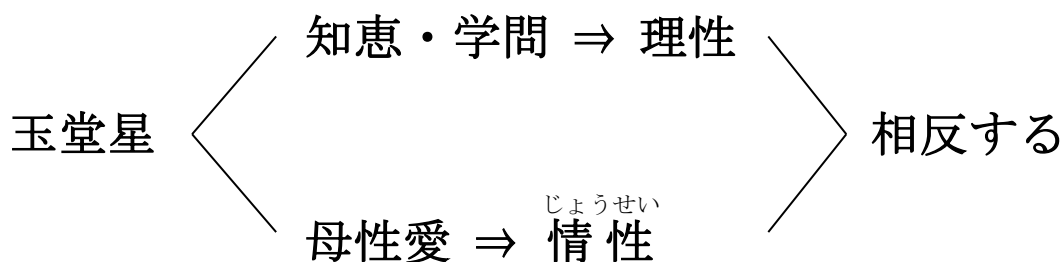
ところが……この二つは“正反対”ともいえます。



「知恵・学問の星」は『理性』で処理する分野であるはずですが。学問を感情で処理していたら、正しい判断になりませんから、こちらは理性で判断するものです。

参考・理性 [感情に走らず、道理に基づいて考え、判断する能力]

しかし、母性愛は理性ではないはずですが。



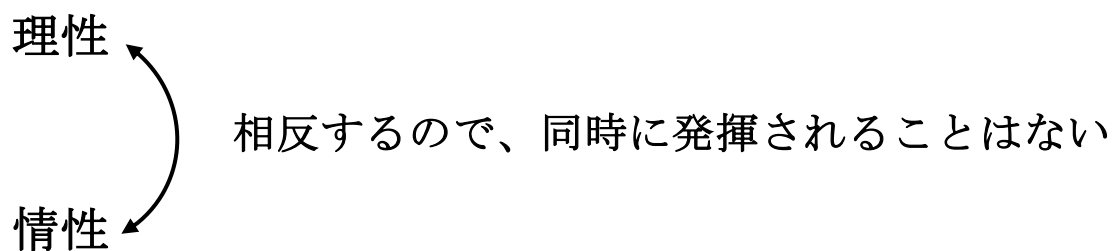
参考・情性 [性質と心情、きだて、内面的はこころ]

なぜ、自分の子どもに愛情をかたむけるのかといえ、それは理屈ではないわけです。参考・理屈 [物事にすじみち。道理]

可愛いものは、かわゆい（心がひかれて、深く愛し、大切にしたい）わけです。

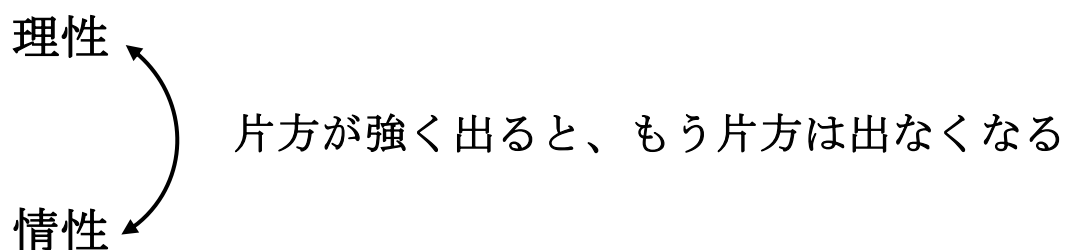
“かわゆい” という心情（心のなかの思い）は理性ではないのです。情性であり慈しみです。

このように、玉堂星は両方の質をそなえていますけど、互いに反対質をもっているために、同時に発揮されることはないのです。



片方が出たときは、片方はなくなります。

もう片方が出たときは、もう片方は出なくなります。



こういう出方になるのです。



☞ 玉堂星の人は、つぎのような事象がよくあります。  
 普段はとても理性的で頭のよい人なのに…… [たとえば]  
 自分の子供のことになる、理性を失ってしまうとか、  
 身内のことになる、もう理屈が通らなくなってしまう。  
 というような出方が多いのです。

[理性が出たり] [情性が出たり] 両方がこの星の良さでもあるのですが、片方ずつしか出せないのです。

理性を出したり、情性を出したり、そのように両方を出すことによって、玉堂星の人は幅が広がって伸びていきます。

しかし片方しか出さないと伸びなくなります。

[たとえば] いつも理性的、ずっと理性的だと、伸びなくなります。人間的にも運勢的にもです。

☞ そうしますと、龍高星・玉堂星はどちらも知恵の星です。その意味ではともに――。

龍高星

頭をつかう仕事に向く

特に自分の本当に興味のある分野へ進むと伸びる

玉堂星

龍高星・玉堂星は、頭をつかう分野に向く……と、いうことですが、つぎのような誤解を招きやすいのです。

「じゃあ、龍高・玉堂が一つもない人は頭が悪いの？」

「龍高・玉堂がある人は頭がいいのか？」と、いうふうな誤解をしやすいのですが、頭の良さとはイコールではないのです。

確かに、龍高星・玉堂星は頭をつかう仕事に向いています。それは適性だといえますが、「自分の本当に興味のある分野へ進むと特に伸びます」という意味です。

〔たとえば〕主星が龍高星か玉堂星の子供が生まれたとします。

この子は知恵の星が主星だから、頭が良さそうなので、いい学校はいに入れるのでは……そうとは限りません。

特に——主星が龍高星・玉堂星だと、自分が本当に興味のある分野だと一生懸命やります。でも、興味が湧かないものには、やる気が起こらないのです。

龍高星・玉堂星の習得本能というのは、自分が必要とする知識を習得しようとする本能なので、初めから、興味のないものに対しては、頭の良さは発揮されないのです。

あることに対して、本当に興味があって、真実、自分が知りたいと思ったときは、すごい頭の良さを出せます。

それゆえに、受験勉強に向くかどうかは別です。

〔龍高星・玉堂星があるから、いい学校に入れる〕——  
それは別のことです。

気をつけないといけのは——特に主星が龍高星・玉堂星の子供を、小さい頃から塾に通わせて、本人は興味がないのに、無理矢理に勉強させるというやり方で育てると、勉強が嫌いな子になってしまうということです。

受験勉強みたいな勉強は、興味があって勉強するわけではないですよ。

自分が本当に覚えたくて、覚えるわけではないですよ。  
試験に出るから、仕方なく覚えるんです。

その意味では、龍高星・玉堂星がないほうが、ああいう勉強には強いんです。龍高星・玉堂星が1個もないほうが、イヤイヤ勉強するのには向いています。

☞ 龍高星・玉堂星の子供が、本当に自分から、その勉強に興味をもつとすごく伸びます。

〔たとえば〕 数学に興味をもったのであれば見事です。

その子はどんどん勝手に勉強して、伸びていくようになります。

ほっておいても、自分から進んで勉強するようになります。

☞ <sup>せいらい</sup> 生来、習得本能の質を備えているわけですから——、我が子に興味をもたせるには、どうしたらよいのか？  
ご両親は頭をつかっていただきたいのです。

☞ 玉堂星の人物は実母です。

人物 ⇒ 生みの母

玉堂星は母親の星と考えておいてください。

母親との関係を占ったりするときは、この星をつかって観ていくようになります。

☞ 玉堂星の考え方は、体制思考といわれます。

思考法 ⇒ 体制的思考

幅広く知識を習得しようとする星です。

幅広く知識を習得すれば、自然と常識が身につきます。

つまり、常識的な考え方ができる人になります。

常識的な考え方ができる人



母性愛が出たときだけは、客観的な見方ができなくなる

通常は常識的な考え方をするのですが、母性愛が出ているとき……〔たとえば〕自分の子供のことになる、客観的な考えができなくて、理性をなくしてしまう。というようなことです。

☞ 十大主星の特性は、一通りこれで終わりです。

終わり……といいますが「基本」が終わっただけです。

各星全部の意味合いを覚えておかなくても大丈夫です。

〔たとえば〕玉堂星ということでは……、

なぜそういう意味があるのか、この星は陰の習得なので、幅広く知識を習得する。

それゆえに、いろいろ物事に興味をもつ、それによって自然と常識的にもなっていく、というふうなことが理解できていれば、あとあと、それが役に立ちます。

【初年】 33回目【十大主星特性⑤】 最終回 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 34回目【人体図のだし方】